

医療専門職の理解とチーム医療の実現のために

東北大学病院副診療技術部長
リハビリテーション部門長

佐藤 房郎



超高齢社会を背景に地域包括ケアシステムが打ち出され、行政と医療施設と福祉施設が連携した町づくりが提案されています。そこには、積極的なリハビリテーションが欠かせません。そこで本号では、私の専門領域であるリハビリテーションの紹介とチーム医療の大切さについて記述しようと思います。

リハビリテーションは、脳卒中の後遺症や外科術後の合併症に対する後療法として発展してきました。現在は、合併症予防の観点から周術期や超急性期の患者さんにも処方されるようになっています。その対象は、呼吸不全や心不全、そして最近ではがんにも広がってきました。超高齢社会を反映し、がんの有病率が高まることが予測されますが、がん診療連携拠点病院の中でもリハビリテーションが充実している施設が少ないのが現状で、当院は、「がんのリハビリテーション」を啓蒙する役割を担っています。さらに、会報第 18 号に紹介された臓器移植にも関わっています。とりわけ、肺移植と心臓移植については、術後リハビリテーションを受けられる体力と精神機能があることが移植の要件に挙げられています。本邦の臓器移植については、待機期間が数年に及び、病状がかなり進行した状態で移植を受けざるを得ません。在宅待機が困難な患者さんは、ドナーが見つかるまで入院待機します。重度呼吸不全では酸素投与しながら、重度心不全では補助人工心臓を装着しながらの待機になり、適度な運動を継続しながら精神的安定を保てるようにフォローしています。その他、病的肥満症に対する胃切除術のような最新の手術法導入に合わせ、今後も対象拡大が予測されます。

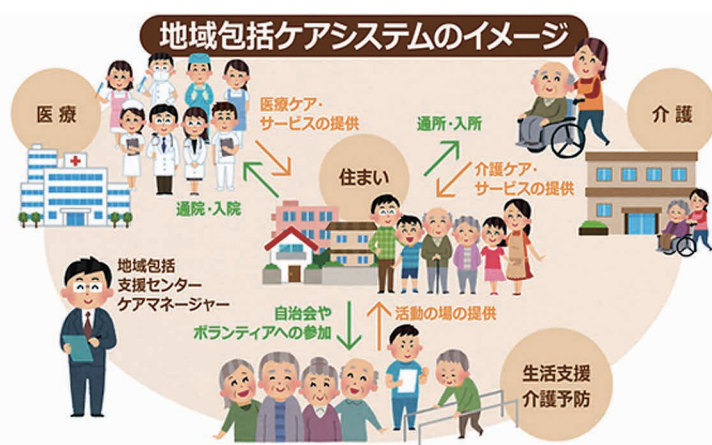
リハビリテーションが目指すところは、患者さんの生活機能向上です。疾病の治癒と障害を克服することは異なり、後遺症が残った場合でもその人らしく生活できるように支援します。疾病によっては機能障害の回復が期待できないものや進行性のものもあり、個人の要望を確認しながら可能な範囲で QOL (Quality of Life) 向上を図ります。大学病院に入院される患者さんの中には、複数の併存疾患や重複障害のために、機能回復が思うように進まない場合があります。入院患者さんの治療はその診療科の専門範囲にとどまるた

め、限られた期間内に最大効果が得られるようにチーム共同で関わります。そのためには、お互いの専門性を理解し、相乗効果が得られるよう働きかける必要があります。例えば、呼吸不全の患者さんに対する内科管理（投薬）と運動療法、そして栄養管理が包括的介入例です。

実は、薬と運動と栄養は切っても切り離せない関係にあります。例えば、覚醒低下をもたらす薬は活動性を抑制するため、リハビリテーションの効果を低減させてしまいます。栄養状態は病期で変わります。外傷や手術の直後では、異化（タンパク質が分解される過程）促進により筋が破壊されるため、過度な運動は逆効果になります。栄養摂取が可能になった段階では、運動後にタンパク質合成を促進するサプリメントを補給することで筋量増加（筋力アップ）や生活機能が向上することが判明しています。

このように、医療は特定の専門職が担い達成されるのではなく、チームで関わってこそ実現できるものです。東北大学では、学部や学科を超えて交流できる機会が保障されています。サークルや臨床実習で多くの仲間を作れる環境を生かし、価値観の多様性に対応できて視野の広い医療人に成長することを願っています。コミュニケーションスキルは、チーム力を向上させ、リスク管理を徹底するために欠かせません。

学生後援会（PTA）は、多くの交流の場を提供できるようにサポートしていきたいと思います。



— 研究室（分野）紹介 —

医学科・救急医学分野

医学部医学科

教授 久志本 成樹

“救急”—医療の世界ではもっとも日常的に触れる言葉です。でも、救急医が何をしているのか、どんな専門性があるのかはあまり知られていないのではないのでしょうか。テレビ番組の“コードブルー”は救急の一面を描くものです。

救急医療では、緊急性への対応、患者が手遅れとなる前に診療を開始することが重要です。ところが、救急患者が医療にアクセスした段階では、①どの程度緊急性が高いのか、②身体のどこに問題があるのかわからないことが多くあります。そのため、いずれの病態の緊急性にも対応できる専門医が必要になります。

救急医は、急病、外傷、中毒など原因や罹患臓器の種類に関わらず、すべての緊急性に対応するスペシャリストです。さらに、重症救急患者には時間を争う救急初療だけでなく、繊細な集中治療が必要となります。一般市民による救急蘇生や救急隊員による患者搬送の体制整備や教育また、災害医療体制整備を適切に行うことにより、システムとしての救急医療が整備されることとなります。

このような臨床領域のすべてを包含するのが救急医療であり、これを科学的に検証し、新しい病態をみつけ、診断と治療法を開発し、社会基盤を整備する学問が“救急医学”です。とても広い領域をカバーしていることが想像できるでしょう。



“攻める”病院前医療としてのドクターヘリ

わたくしたちの研究をいくつか紹介してみます。

○ダメージ関連分子パターンに注目した生体応答制御にむけた研究

感染症では、病原微生物由来分子パターンが、生体に炎症反応を引き起こしますが、感染のない外傷や手術後の患者でも同じような生体反応がみられます。自己の細胞内成分である“alarmins”によるものと考えられていますが、どのような分子がいかなる役割をしているかははっきりとしていません。敗血症、心停止後症候群、外傷など患者を中心として臨床的な検討をしています。

○侵襲病態における Muse 細胞に注目した間葉系幹細胞による治療に向けた研究

再生医療では、iPS 細胞が世界をリードしていますが、再生・細胞治療として注目されるもうひとつの細胞が Muse 細胞です。多発外傷や重症感染症などの重症患者では、脳、心臓などのひとつの臓器にとどまらない全身の再生が望まれます。新たな治療としての Muse 細胞の可能性を求める研究をはじめています。



シミュレーション教育のメッカとしての救急医学

○外傷急性期凝固異常の病態解明と治療法開発

重症外傷患者の急性期死亡原因は、重症頭部外傷と大量出血です。この出血を適切に制御するための病態解析と治療法開発に向けて、日本の救急医療機関の中心となって多施設臨床研究を行い、世界に大きなメッセージを発信しています。

○臨床データベース構築に基づく二次侵襲制御に向けた研究

外傷や熱傷の患者では、すでに身体に大きなダメージがあります。医療においては、このダメージをすでに被っている患者への二次的ダメージを最小限にすることが大切な治療となります。病院前データ、救急初療および集中治療室に蓄積された“ビッグデータ”をもとに、二次侵襲発生状況をインフォマティクスにより解析し、回避対策を模索しています。これらに加えて、東日本大震災での“避けうる災害関連死”を明らかにするなど、“DNA、生体内分子、再生医療、多施設臨床研究、ビッグデータメディシンから災害医学へ”と、広い視野からの幅広い研究が“救急医学”の醍醐味といえるでしょう。

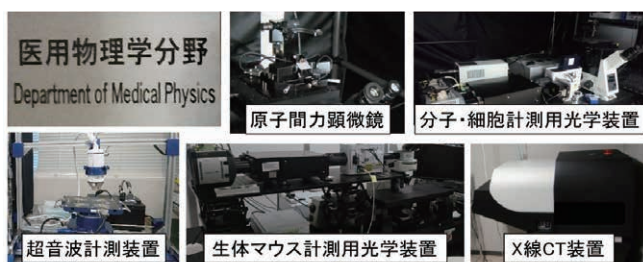


伊勢・志摩サミットの医療を支えるスタッフ

保健学科・医用物理学分野

医学部保健学科

教授 権田 幸祐



研究室の主な装置：分子から生体マウスやヒト組織のレベルまでイメージング

医用物理学分野は、先代の田村教授の後任として2013年5月に私が着任し、研究・教育を進めています。分野内には、陽電子放出断層撮影（PET）の研究グループと私の研究グループの2つのグループがあります。本稿では、誌面スペースの都合から、私のグループについて紹介します。

私の研究室の2017年度のメンバーは、教授1名、助教3名（1名は他組織より出向）、技術補佐員1名、事務補佐員1名、博士課程5名（4名は医科学専攻より出向）、修士課程2名、卒業研究3名です（星陵会館前集合写真参照）。助教、大学院生、卒研生は各々個別のテーマを持ち、がんや動脈硬化症を対象とした研究に取り組んでいます。

がんや動脈硬化症の診断や治療を効果的に行うには、病態のイメージング技術が重要です。我々は、これらの疾病メカニズムの解明を行い、その概念を疾病の診断や治療の技術開発へ応用するために、高精度なX線 Computed Tomography (CT) イメージングや蛍光イメージングの技術開発を（装置写真参照）、ナノメディシンを用いて行っています。（ナノメディシン：ナノテクノロジーと医学・医療を融合した研究分野）

我々は、ナノメディシン技術として、直径15～150ナノメートル（1ナノメートルは百万分の1ミリメートル）の様々なナノ粒子プローブを開発し、X線CTや蛍光のイメージングへ応用しています。X線CTの信号強度はX線吸収ナノ粒子の量に比例し、蛍光の信号強度は蛍光ナノ粒子の量と励起光の出力に比例します。したがって、我々のX線CTや蛍光イメージング法は、高い定量性を保持する可視化法になります。

これまでに我々は、疾病モデルマウスとナノ粒子を用いた生体イメージングにより、がんの転移過程で膜蛋白質の拡散速度が1,000倍以上に変化すること、末梢動脈疾患の血管新生では、血管内皮増殖因子受容体発現量のわずか3倍の分布勾配が重要であること、などを解明

してきました。現在、これらの技術は、がんや末梢動脈疾患における脈管構造のリモデリング機構の解明、がん患者の放射線治療効果を増強させる方法の基盤技術開発などへ展開し、興味深い成果が得られています。さらに、手術で摘出したヒトがん組織の病理診断に蛍光イメージングを応用し、患者の予後や薬効を高確度で診断する技術開発に成功しています。

以上の研究を遂行するために、我々は異分野融合、国際交流、産学連携の3点を重要視しています。高いレベルの研究成果を効率よく産み出すには、多角的な視野で研究課題を考察することが有効です。

私の研究室には、医学、生物学、工学、化学などを背景とするメンバーが集まっており、各学問分野の概念や技術を背景に、研究課題を皆で議論し、解決へ向けて切磋琢磨しています。

研究成果のアピールには、積極的な国際交流が重要です。海外の国際会議・学会で発表することはもちろん、今年は2件の国際会議を私の研究室が主催で開催しました。その内の1件は、10名の海外研究者が参加した100名規模のナノメディシン関連の国際会議であり（星陵会館前集合写真参照）、研究室のメンバーにとって国際交流能を高めるよい機会になったと思います。

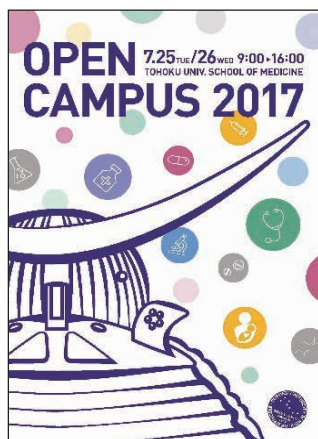
産学連携研究は、研究成果を社会へ発信する上で効果的な手法の1つです。私の研究室は、企業との共同研究を積極的に進めており、ナノ粒子を応用したがん組織の高精度診断技術の成果が、2017年の8月末に日経新聞に掲載されました。

我々の研究室では、皆のアイデア・知識・技術を融合し、議論とチームワークを大切にしながら、楽しくかつ真摯に日々研究課題に向き合っています。我々の研究内容に興味のある方は、ぜひ見学にいらして下さい。



集合写真：ナノメディシン関連の国際会議にて（2017.12.15）

平成 29 年度医学部オープンキャンパスを開催しました



平成 29 年 7 月 25 日（火）、26 日（水）の 2 日間、東北大学医学部・医学系研究科オープンキャンパスが星陵キャンパスにおいて開催されました。1 日目は雨模様ではありましたが、夏らしい暑さの中、学生実行委員、学

生ボランティア、教職員が一体となって、過去最高の 5,844 名の来場者をお迎えすることができました。

医学科からの報告です。

今回も充実した企画を揃え、来場者に医学科をより深く理解してもらうことができるような内容となりました。

「医学科案内ツアー」は、研究現場、最新の研究・治療



機器などを見学しましたが、例年通りとても人気の高い企画でした。また、星陵オーデトリウムにおいて、大学での講義を体験する「記念講演・講義」、大学での実験を体験する「実験実演コーナー」、さらに、良陵会館のスキルスラボでの「手技体験」と「救急体験」を行いましたが大変好評でした。「医療を覗き見！コーナー（ビデオ上映）」では、医学科学生が高校生達に解説を交えて上映を行い、「入試体験談」・「学生と語ろう」では、高校生からの様々な質問に答え、いずれの企画にも多くの高校生が詰め掛けました。さらに、参加者がより楽しめる「シールキャンペーン」（シールを集めて景品と交換）を実施し、好評を得ました。

また、「附属図書館医学分館」、「大学病院」、「加齢医学研究所」、「エコチル調査宮城ユニットセンター」、「東北メディカル・メガバンク機構」からも出展があり、参加

医学部オープンキャンパス推進委員会

委員長

保健学科広報部会長

大学院 修士課程長

神宮 啓一
塩飽 仁
大和田祐二

者にとっては得るものが多いオープンキャンパスになったと思います。

保健学科からの報告です。

「模擬講義」、「保健学科案内ツアー」、「実習体験コーナー」さらに、「デモンストレーションコーナー」を企画し、各専攻の特徴が分かりやすく理解できる機会を設けました。

また、「保健学科入試・カリキュラム・卒後の進路等の相談コーナー」、「卒業生と語ろうコーナー」、「在学生による入試体験談や学生生活相談コーナー」では、学部及び大学院生、卒業生と触れ合いの場を設け、卒業後の進路をイメージしてもらえるように工夫をしました。

看護学専攻では、ツアーや実習体験コーナーなどを準備しました。参加者は、実際に新生児モデルに触ったり、看護の基礎的な技術を体験したりと様々な体験を楽しんでいました。

放射線技術科学専攻では、ツアーやデモンストレーション、模擬講義での専攻紹介を実施し、模擬講義は、分かりやすい講義で好評でした。

検査技術科学専攻でも学生がツアーや展示を行い、模擬講義も担当しました。



大学院医学系研究科からの報告です。

大学院パネル展示コーナーにおいて、大学院学生や教員が大学院の紹介を行いました。医学部の学生が卒業後どのようなキャリアを積んでいるのか、入学後どのような研究をしているのかを説明しました。参加した高校生に、大学進学だけでなく将来について考える機会を与える場となり、例年にない盛況な2日間のオープンキャンパスとなりました。

最後に、関係者を代表して、医学部学生後援会（PTA）からのご援助を心から感謝申し上げます。



保健学科ウェアセレモニーについて

医学部保健学科長 菅原 明



保健学科では、医療人としての心構えを育てるために、平成23年度から学外で行う臨床実習の開始前にウェアセレモニーを行っています。

今年は、検査技術科学専攻が9月21日（木）、放射線技術科学専攻が10月5日（木）にそれぞれ実施しました。医学部学生後援会（PTA）からの支援により、各専攻の学生に対して、東北大学ロゴマーク刺繍入り診察衣等を贈呈しました。

この度は、ご支援をいただき、誠にありがとうございました。この場をお借りして、改めて感謝申し上げます。



平成29年度医学科3年次基礎医学修練発表会について

医学科運営委員会副委員長（基礎医学担当）

医学科3年次基礎医学修練発表会実行委員会委員長

虫明 元
渡嘉敷 直之

平成29年度の基礎医学修練発表会は、平成30年1月10日（水）、11日（木）の2日間行われ、発表者は口頭で89人、ポスターで9人でした。

今年の基礎医学修練は、カリキュラム変更に伴い例年よりも期間が短縮され、発表会も前倒しで開催される事となりました。しかし、研究期間短縮にもかかわらず、各人が非常に興味深いテーマの研究に取り組み、我々も聴衆として参加していた昨年の発表会に負けず劣らずの会にすることが出来ました。

また、研究期間が短かったことで十分な結果が出せなかった人もおりましたが、多くの発表者が今後も継続して研究を行っていきたいと述べており、今後同級生の中から研究成果を出し活躍していく人が出てくると考えると今から楽しみでなりません。

海外留学を行った学生による英語での発表、質疑応答も行われました。日本とは異なる環境で困難にぶつかることがありつつも、それを乗り越えてきた経験が発表にも現れていて、国内で研究を行った学生にとっても大変

良い刺激となりました。

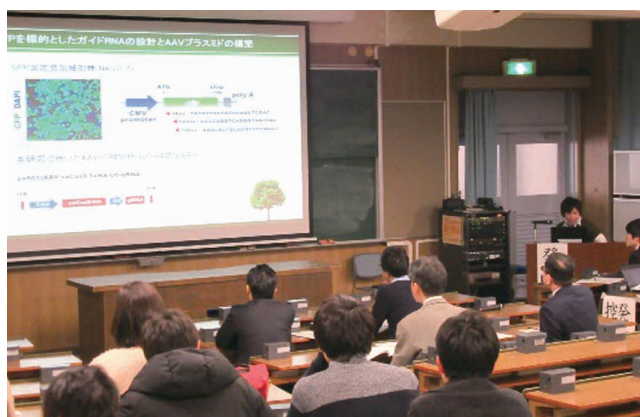
発表会の運営は全て学生で組織された実行委員会を中心にわれ、少人数ながらも各々が責任を持って仕事を行ってくれたことで円滑に進行できました。また、実行委員以外の同級生も実行委員会からの無理なスケジュールでの発表準備をお願いしても、快く協力してもらったため、準備から当日まで大きな問題も無く運営することが出来ました。

今年も発表会の演題に対して口頭、ポスター共に4つの評価項目を設け、学生と教員で公平な評価を行うよう

にしました。

特に優れた演題に対しては、賞状と副賞として図書カードを授与しました。

今年度の基礎医学修練も多くの方々のご支援、ご協力のおかげで無事終わることが出来ました。特に、医学部学生後援会（PTA）のご支援により運営費を確保することが出来たことで、本会を質の高い有意義な会にすることが出来ました。関係者一同、多大なるご支援を心から感謝を申し上げます。



口演発表の様子



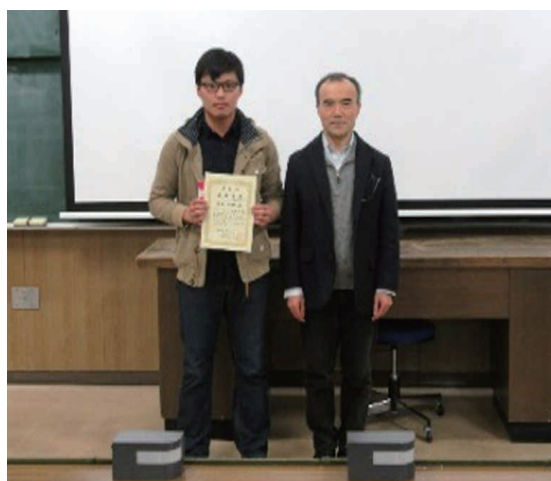
口演発表の様子



熱心な質疑応答



ポスターセッション会場の様子



基礎医学修練発表会最優秀者表彰式

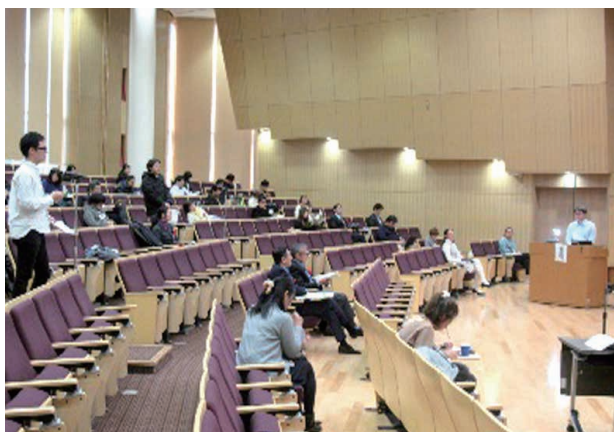


実行委員会集合写真

第 11 回リトリート大学院生研究発表会について

第 11 回リトリート大学院生研究発表会 実行委員会

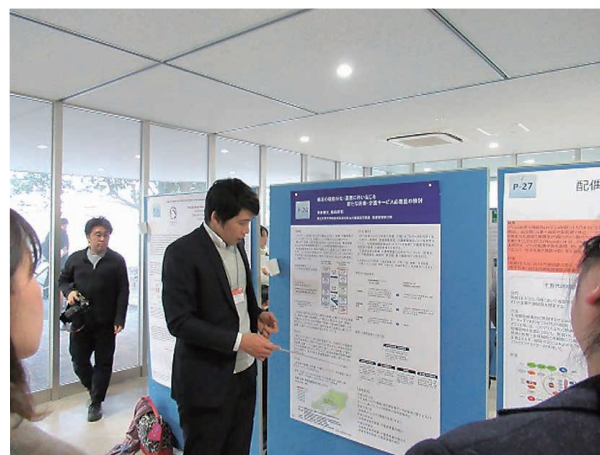
去る、平成 30 年 1 月 13 日（土）に、医学部学生後援会（PTA）のご支援を頂き、東北大学星陵キャンパス星陵オーディトリウムにおいて、『第 11 回リトリート大学院生研究発表会』が開催されました。



このリトリートは、医学系研究科の多様な分野に所属する大学院生が集い、運営し、学生主体で作上げた研究発表会です。例年、大学院生だけでなく多くの医学部学生にも参加して頂いております。

第 11 回となる今年度は、『激論！ダイバーシティが導く医学研究の創造と発展』というテーマを掲げて開催致しました。続いてきたリトリートは昨年度で節目の 10 回を数え、今後もこの素晴らしい機会を次の 10 年に繋げ、より一層の医学研究の発展の礎となればという想いを込めてテーマを決定しました。

このテーマのもとに開催された今回のリトリートは、合計 92 題（口頭演題 25 題、ポスター発表 67 題）の演題を受け付け、当日は 151 名の方々にご参加をいただきました。会場は、分野や国籍の壁を越えた活発な議論や交流で溢れかえっており、普段は触れることのない



研究分野に触れ、今後の研究に良い刺激を得る機会になったと確信しております。

さらに、今回のリトリートでは、3 名の医学部学生から演題応募があり、ポスター発表を行っていただきました。いずれも大学院生顔負けの素晴らしい発表であり、その活躍には医学部学生後援会（PTA）から研究奨励賞及び優秀学生賞が授与されました。なかでも研究奨励賞は、全演題の中から最も将来性のある研究に贈られる賞であり、大学院生と比較しても高い評価を得ていたことがわかります。また、優れた質問を投げかけ、有意義な討論を行った方に贈られる優秀質問賞を医学部学生が受賞しました。

今後も素晴らしい研究をした医学部学生に、是非リトリートへ参加頂けることを実行委員一同が願っております。

末筆ではございますが、本研究発表会の開催にあたり、ご支援、ご協力を賜りました皆様方、並びにご来場頂きました皆様方に、この場をお借りして、実行委員会一同心からお礼を申し上げます。



私の学生生活

医学部医学科 5 年

島岡 佑典



東北大学へ入学して早くも 5 年が経ちました。現在は臨床実習に取り組む毎日です。憧れだった医師に一步步近づいていく期待が高まる反面、残り僅かとなった学生生活を名残惜しく思います。学生のうちにしか出来ない事は様々あると思いますが、今回この場をお借りしまして、私が最近取り組んでいる「Smile Future JAPAN」での活動について紹介させていただきます。

Smile Future JAPAN (SFJ) は、こどもたちが幸せに暮らせる社会を目指し、小児医療に関連して医学部生が貢献できることを考え、企画している学生組織です。

現在は主に薬剤耐性菌の問題を取り上げ、抗菌薬（抗生物質）の適切な使い方について市民の皆さんへ啓発活動を行っています。適切な使い方とは、抗菌薬を「残さない（症状が改善しても飲みきる）、あげない（他人に渡さない）、もらわない（必要無い時はもらわない）」ということです。風邪、特に子どもの風邪は殆どがウイルス性のため、抗菌薬は効果がありません。不適切な使用は薬剤耐性菌を生じる原因になってしまいます。

これは世界的な問題となっており、薬剤耐性菌の犠牲者数は 2014 年に年間 70 万人のところ 2050 年には 1000 万人に増加するという論文報告もあり、これは悪性腫瘍による犠牲者数を大きく超える数です。

この問題を受け私たち SFJ は、抗菌薬の適切な使い方に加え、手洗いやマスク等の感染予防について親子で学べるイベント「さよならバイキンだいさくせん」を開催しました。

子ども達が楽しみながら学べるよう劇やゲーム、手洗い体操などを企画し、沢山の子どもたちやご家族の皆さんにご来場いただきました。先輩方の代から続いているこの活動で、昨年は内閣官房から評価していただき「薬剤

耐性対策推進国民啓発会議議長賞」を受賞いたしました。

今後、より多くの方々に薬剤耐性菌の問題について発信できるように、同志達と熱く語り合いながら計画を立てています。

私が SFJ の活動に取り組もうと思ったきっかけは、学生から市民の皆さんに発信するという活動内容に興味を持ったからです。私たちの活動は、成果を目に見える形で確認する事は難しいですが、市民の皆さんに抗菌薬の適切な使用について知っていただき、また、薬剤耐性菌について関心を持っていただくことで、将来的に病気を予防し薬剤耐性菌のリスクを減らす手助けになるはずだと考えています。学生として出来る事は限られてしまっていますが、私は今回の経験を通して、社会への発信・啓蒙活動という視点も医療従事者としての大切な一面である事を学びました。

今後は、自分がどんな医師を目指し、何を為していくのか未だ試行錯誤の段階ですが、今回の学びは自分の将来を考える上で重要な気付きとなりました。今後どのような道を進むとしても、この SFJ での経験を糧とし、精進していきたいと強く思います。



私の大学生活

医学部保健学科放射線技術科学専攻 4 年

佐藤 雄介



東北大学に入学したのは、4 年前の 4 月であることを考えると時が経つのが早く感じます。放射線技術科学専

攻のみなさんは個性が豊かであり、日々の勉学を共にするだけではなく、節目の打ち上げなども積極的に行うこ

とで良好な関係を築くことができた良い仲間であると感じています。この仲間たちと共に4年間を過ごしたことで素晴らしい学生生活が送れたことを非常に感謝しております。

学生生活では、病院実習と卒業研究は特に印象的なものになりました。病院実習は3年から4年にかけて行われ、これまで授業等で学んだ知識が臨床の現場でどのように扱われているかを確認するつもりで臨みました。

しかし、現場で働いている放射線技師や医療関係職員の方々の知識は非常に豊富で多岐にわたっており、今まで学んだ知識以上に新しく吸収するものが多く、放射線技師として社会に出るにはまだまだ知識も経験も足りていないことを知り、更なる勉強と経験が必要であることを思い知らされました。

卒業研究については、3年の12月に研究室への配属が決まって以降翌年12月の卒研発表を目標に進めてき

ました。私の所属する医用画像工学分野では、保健学科の学生の他にも海外からの留学生や博士研究員、連携先の工学部学生さらに、教員と様々な方々が所属され、連携しており、幅広い分野の知識を持つ方々に囲まれ、非常に良い環境で研究を進めることができました。

この1年間、研究というものを自分なりに進めてきたが、医学の進歩には工学や他の分野の進歩も欠かせないことを改めて認識することができました。また、目標であった卒研発表会での発表だけではなく、外部の研究会での発表の機会を得られたことは大変良い経験になったと感じています。

この大学生活を通して得られた知識や経験はかけがえないものあり、私自身は、4年前より知識と経験において大きく成長できたと感じています。これまで関わってきた皆様への感謝を忘れぬようにし、卒業後の人生を良いものにしていきたいと思っています。

医学分館の学習用図書の整備・充実について

東北大学附属図書館医学分館長

北本 哲之

医学分館は、医学系の図書館として、星陵キャンパスに所属する学生・教職員の方々に、学習、研究や教育に必要な図書や学習環境を日々提供しています。

医学系の図書は単価が高く、頻繁に改版されるため、一度に整備することが困難です。そのため、新刊本をよく利用する学生にとって、当館はまだ十分な学習環境とはいえません。

このような状況から、医学部学生後援会（PTA）にお願いしたところ、昨年度に引き続き図書購入のご支援をいただきました。

今年度は、医学分野は『集中講義生化学：カラーイラストで学ぶ』ほか41点、看護分野は『ハート先生の看護学生のための心電図教室』ほか10点、放射線技術分

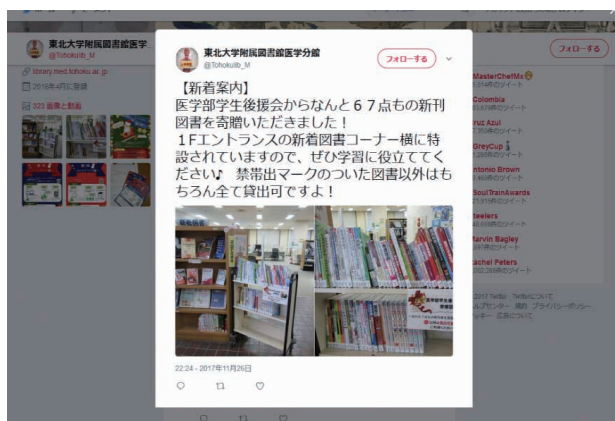


野は『放射線治療学』ほか6点、検査技術分野は『判読力を高める！循環器超音波検査士への最短コース』ほか2点、その他医事法やプレゼン・論文作成についても4点で新刊本を含め合計67点整備できました。寄贈図書は、11月末からエレベーター脇に展示しております。

医学分館では、国試・学習用図書コーナーの充実、グループ学習室やTwitterの運用等よりよいサービスを提供できるように今年度も順次改善しております。

上記のような図書購入と合わせ、自学自習の場として環境を整備し、館員一同お待ちしておりますので、是非ご活用して下さい。

この度はご支援をいただき、誠にありがとうございました。この場をお借りして、改めて感謝と御礼申し上げます。



東北大学医学部学生後援会(PTA)主催の「入学記念祝賀会」へのご案内



今春(平成30年4月)、東北大学医学科及び保健学科に入学する新入生及び保護者の方を対象とした「入学記念祝賀会」を

右記のとおり開催いたします。

この祝賀会では、学科の紹介、説明及び在学中の勉学や学生生活などの様子と医学部教職員及び在学生との懇談も行われます。



学生後援会(PTA)会員の皆様におかれましては、会員同士が集う良い機会と思われますので、会員同士がお誘いあわせ願ひ、御出席くださいますようお願いしております。

なお、当日は、東北大学全体の入学式(午前中)が行われますので、午後に会場を移動して開催するものです。

- ★日 時：平成30年4月4日(水)
午後1時から(2時間程度)
- ★会 場：江陽グランドホテル・鳳凰の間・5階
(仙台市青葉区本町二丁目3-1
TEL：022-267-5111)
- ★祝賀会の主な内容
 - 医学部長の挨拶
 - 学生後援会(PTA)会長の挨拶
 - 来賓等の紹介・祝辞
 - 祝宴・懇談
 - 医学科及び保健学科の紹介・説明など
 - 在学生からの歓迎の挨拶など
- ★会費は無料です。
- ★事前のお申し込みは不要です。
- ★軽食及び飲み物を準備しております。

事 務 室

編集後記

医学部学生後援会(PTA)は11年目を迎えましたが、会員の皆様方、学生及び教職員の方々に支えられ、順調な活動ができましたことについて感謝を申し上げます。

今春も、夢と希望に満ち溢れた新入生の皆様方の入学を心からお慶び申し上げます。また、入学後の学生生活に係る支援の一端を担えさせていただければ幸いです。

本学生後援会(PTA)は、学生への支援・助成活動[入学記念祝賀会開催、新入生オリエンテーション及びオープンキャンパスへの助成、学生用図書を整備と充実、卒業謝恩会への助成等]などに積極的に取り組み、その活動

の様子を年2回発行する学生後援会(PTA)会報により会員(保護者)の皆様方にお知らせしております。また、学生、保護者そして、本学部教職員との交流にも努めてまいりますので、更なる御支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

つきましては、学生後援会(PTA)の発展と充実のため、会員の皆様方からの御意見をお待ちしております。

ご寄稿は、郵便又は電子メールでお願い申し上げます。

事 務 室



東北大学医学部学生後援会(PTA)事務局

〒980-8575 仙台市青葉区星陵町2-1
TEL：022-717-7870 E-mail：med-koen@med.tohoku.ac.jp
<http://www.koen.med.tohoku.ac.jp/>